

審査の結果の要旨

氏名 鈴木 雅之

本論文は、テストが学習者の学習方略に及ぼす影響を明らかにする過程で、効果的なテスト運用方法の提案とその効果検証を行ったものである。

第Ⅰ部ではまず、テストを実施した際に、学習者の動機づけや学習方略が受ける影響を統合的に説明できる理論が見られないことと、学校教育におけるテスト運用の問題点を指摘した。そして、テストの実施目的・役割に対する学習者の認識である「テスト観」に着目し、テストの影響を望ましい方向にしていくために、適切なテスト観を形成することが重要であることを主張している。

第Ⅱ部では、テスト観尺度の作成を行っている。研究1では、テスト観尺度が、テストは自身の理解状態を把握し学習改善に活用するためのものとする「改善」、自発的に学習を行うためのペースメーカーとする「誘導」、他者と比較するためのものとする「比較」、勉強を強制させるためのものとする「強制」の4つの因子から成ることを示している。研究2では、一般的水準でのテスト観のみならず、定期テスト、模擬テストといったテストの種類や教科の違いに応じて、固有のテスト観が保持されていることが示唆された。

第Ⅲ部では、テスト観と学習方略の関連について検討している。研究3の結果として、「改善」や「誘導」を強く認識する学習者は、適応的な学習方略を用いる傾向があること、「強制」を強く認識する学習者は、目前のテストに対処するための形骸化した学習をしがちであることが示唆された。研究4では、研究3の問題点を修正した上で調査・分析を行い、研究3と同様の結果を確認した。これら一連の結果は、有能感の低い学習者であっても、テストに対する認識を変えることで、効果的な学習方略の使用を促進できる可能性を示すものであるとしている。

第Ⅳ部では、テスト運用方法とテスト観の関連について検討を行っている。研究5として、テストの実施目的を伝達すること、評価基準が明確になるようにテストを実施すること、実用性の高い問題をテストで出題すること等が、肯定的なテスト観の形成において重要であることを示した。

第Ⅴ部では、テスト結果を学習者にフィードバックする際にルーブリックを提示し、評価基準と評価目的を明確にすることの効果について、数学の実験授業を行って検討している。研究6では、ルーブリックを提示された群は、提示されなかった群と比較して、「改善」や内発的動機づけが高く、暗記よりも理解を指向して授業を受ける傾向にあり、最終日の総合テストでも高い成績をおさめたとしている。また、パス解析を行った結果、動機づけと学習方略、テスト成績への影響は、ルーブリックの提示によって直接引き起こされたのではなく、テスト観を媒介したものであることが示唆された。研究7では、研究6の問題を改善して実験授業を行い、その結果が再現されたとしている。これにより、肯定的なテスト観を形成する上でルーブリックが有用であり、またテスト観が学習動機および学習方略に影響を与えるという因果関係が示唆された。最後に第Ⅵ部では、これまでの成果をまとめて、本論文の結論を述べるとともに、理論的・実践的な示唆と本稿の限界を考察している。

このように、本論文は、テストの影響を規定する要因としてテスト観が重要であることを実証的に示し、適切なテスト観を形成するための具体的な方策の提案を行ったものであり、理論的にも実践的にも極めて意義のある研究といえる。よって、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい論文であると評価された。